

情報通信審議会 情報通信技術分科会 技術戦略委員会  
共創イノベーションワーキンググループ（第3回）

議事概要

1. 日時

令和2年3月12日（木） 10時00分～11時45分

2. 場所

総務省10階 共用1001会議室

3. 議題

- (1) 技術戦略委員会について
- (2) 重点領域WGの検討状況について
- (3) 共創イノベーションWGとりまとめ（案）について
- (4) その他

4. 出席者

- (1) 構成員（主任等を除き五十音順、敬称略）  
森川主任（東京大学）、浅見構成員（国際電気通信基礎技術研究所）、  
岩科構成員（日本電信電話）、栄藤構成員（大阪大学）、三瓶構成員（大阪大学）、  
西角構成員（三菱総合研究所）、安井構成員（情報通信研究機構）
- (2) 総務省（国際戦略局）  
二宮官房審議官（国際技術、サイバーセキュリティ担当）、松井技術政策課長  
山口通信規格課長、森下宇宙通信政策課長、高村研究推進室長
- (3) 事務局（国際戦略局 技術政策課）  
山野企画官、中川統括補佐、加藤課長補佐

## 5. 配付資料

資料3-1	技術戦略委員会（第24回）について
資料3-2	重点領域WGの検討状況
資料3-3	共創イノベーションWGとりまとめ（案）
資料3-4	NICTテストベッドの検討状況
参考資料1	共創イノベーションWG（第2回）議事概要
参考資料2	共創イノベーションWG関連の主な意見・コメント
参考資料3	資料3-3 参考資料集
参考資料4	スケジュール

## 6. 議事概要

3. の議題について検討を行った。議事概要は以下のとおり。

### （1）技術戦略委員会について

事務局より、資料3-1に基づき説明がなされた。

### （2）重点領域WGの検討状況について

事務局より、資料3-2に基づき説明がなされた。

### （3）共創イノベーションWGとりまとめ（案）について

事務局より、資料3-3に基づき説明がなされた。あわせて、安井構成員より資料3-4に基づき説明がなされた。主な意見等の概要は以下のとおり。

- 3 ページ目の表だが、5Gの時代においては、1つのシステムが1社で対応できないレベルになったというのが重要なポイントだと思う。
- 4 ページ目の右下の連携・ネットワーク構築において、海外の企業なしではできない領域もあり、何を日本ではやり何をやらないかという話と、どうしたらその中で日本の地位が得られるのかを、よく考えるべきである。
- 調査という言葉があるが、事例を調べるだけにならないようにすべき。また、NICTは場になるはずで、色々な人たちを巻き込み、巻き込まれた人それぞれが主体感を持てるように取り組めれば良い。

- 6 ページ目において、まさにこのシード期が重要で、そこに対して色々な投資をすべきだが、ビジネスの能力という問題もある。そこをどうサポート、強化していくかという観点が必要。
- いわゆるディープテックと呼ばれている研究開発型スタートアップをきちんと目ききできるベンチャーキャピタル（VC）が日本にはほとんどいない。
- 技術シーズをベンチャーの創出・育成につなげていくにあたって、研究機関の内部で創出される領域ごとの技術だけを寄せ集めても、なかなかサービスにはつながらない。内部の技術を実装していくという発想ばかりだと厳しいので、外にある技術、外国にある技術も含めどうマッシュアップすべきかといった視点は何らかの形で加味していく必要がある。
- 根本的にグローバルで展開されるロジックと日本のロジックが異なり、方向性も真逆であることが多い。グローバルではストレートに物を言うが、それに対して、日本はオブラートに包みがちなプレゼンが多い。グローバルな視点でビジネスまで含めて進めていく必要がある。
- 7 ページ目の国研発ベンチャーだが、例えばNICTの内部から意識を変えていくのであれば、NICT内にアントレプレナーシップ講座等のポスターを張り、地道にやっていくのも一つの手法かと思う。
- ハブ機能の上にあるマーケット構想が重要。ある技術に対して数年後どのような姿を描くのか、必要に応じてホワイトペーパーをしっかりと作って意識合わせをすることも必要だろう。
- テストベッドの今後の取り組みについて、特にBeyond 5Gのテストベッドがちゃんと動くようにするためには、ハードウェア、ソフトウェアの仕様がある程度固まった上で、アプリケーションの実証を実施する必要がある、その点は留意が必要である。
- 社会実装関連で、ファーストユーザー（自治体、企業等）を共同実施者として必須とする条件の追加はいいと思うが、国からの支援があればやってもいいという自治体がほとんどだろう。国の支援がなくなった後でも、きちんと自走できるような仕組みはしっかり考えるべき。
- NICTの中で足りない分野に外部から人を入れるというのは分かるが、研究者自身が足りていない要素を知ることが重要。今足りていないとされる能力は、研究者等の職員も必要とされる能力だと思う。
- コロナウイルスの中で今何が起きているかということ、テレワーキングの実証試験という

よりも、その何桁か上のレベルでのテレワークিংとなっている。今後は社会活動の中で場所が分離するという流れになり、その次に、自由に場所を選べる融合の話が起きる。このような非連続的事象の中で何が起きるのかということも、研究開発では想定すべきであり、その影響を埋めることが情報通信の最も重要なミッションになるのではないのかと思う。

(以上)